半導体漫遊記 160

湯之上隆

米マイクロン、突然のCEO交代
狙いは2兆円のドジョウ

東芝メモリの買収について、同業他社である米マイクロン・テクノロジーは、3月29日に行われた1次入札を通過できなかった。その後、マイクロンは、東芝メモリの買収の舞台から消えた。

そのマイクロンのCEOが5月8日に突然、交代した。新CEOに就任したのは、米サンディスクの共同創業者の1人で、2016年まで同社のCEOを務めていたサンジェイ・メイロトラ氏である。筆者の記憶によれば、マイクロンが、外部からCEOを招聘(しょうへい)したのは初めてなのではないか。

普通、3万人規模の大企業のCEOが交代する場合は、半年～1年前にニュースリリースがある。ところが、マイクロンのCEO交代のニュースが報道されたのは。4月27日である。つまり、たったの10日ほど前に発表して、突然、新CEOが就任した。

サンジェイ氏は、00年から17年間、四日市工場で東芝とNANDの共同開発および製造に関わってきた。つまり、現在の東芝とウエスタンデジタル（WD）の内情を知り抜いている人物である。そのようなサンジェイ氏をマイクロンは、CEOにスカウトしたのである。

これは一体、何を意味しているのだろうか？　マイクロンは何をたくらんでいるのか？

マイクロンは、DRAMとNANDをつくっている。DRAMについて、マイクロンは、12年に経営破綻したエルピーダをたった2000億円で買収した。つまり、マイクロンは倒産したエルピーダを二束三文で手に入れたのだ。

エルピーダ買収の際、独占禁止法は一切問われなかった。ここから、同業他社が買収する場合、独占禁止法の審査を逃れる方法が、たった1つあることが見えてくる。それは、経営破綻した相手を買収するケースである。

その元エルピーダ広島工場（現マイクロンジャパン）では、スマホ用DRAMの生産がフル稼働状態であり、絶好調となっている。つまり、マイクロンは、「スマホ用DRAM」という金の卵を産む鶏を二束三文で手に入れたのだ。

エルピーダ買収の実績があるのだ。つまり、マイクロンは、柳の下の2匹目のドジョウを狙っているのである。

マイクロンは、カネも手間もかけずに、極めてスマートな（ずる賢い）方法で、月産60万枚の世界最大規模のNAND工場と1万人強の技術者を手に入れようとしている。これぞ、アングロサクソン族の戦略であるとうならざるを得ない（背筋が寒くなる）。

東芝とWDはケンカや裁判をやっている場合ではない。直ちに和解するべきである。

（微細加工研究所・所長）

マイクロンの新CEOに就任したサンジェイ・メイロトラ氏

出所：マイクロンテクノロジーのHPより引用

そして、弱り果て、経営破綻した四日市工場を、二束三文で買いたたく。それを虎視眈々(たんたん)と狙っているのが、サンディスクの元CEOを招聘したマイクロンの魂胆ではないか。何しろ、エルピーダ買収の際、独占禁止法は一切問われなかった。この裁判の判決が出るまでには数年かかる。すると、債務超過を回避できない東芝も、東芝メモリも、WD（のNAND）も、経営破綻するだろう。

そして、弱り果て、経営破綻した四日市工場を、二束三文で買いたたく。それを虎視眈々と狙っているのが、サンディスクの元CEOを招聘したマイクロンの魂胆ではないか。何しろ、エルピーダ買収の実績があるのだ。つまり、マイクロンは、柳の下の2匹目のドジョウを狙っているのである。

マイクロンは、カネも手間もかけずに、極めてスマートな（ずる賢い）方法で、月産60万枚の世界最大規模のNAND工場と1万人強の技術者を手に入れようとしている。これぞ、アングロサクソン族の戦略であるとうならざるを得ない（背筋が寒くなる）。

東芝とWDはケンカや裁判をやっている場合ではない。直ちに和解するべきである。

（微細加工研究所・所長）